精騎集

和之部

特別
イ 4
3159
B45

A4
3159
B45

鄭出第一等之須有更一等意
欲為第一等人須作第一等事
擊壤集

其角 七四句　嵐雪 二八句
去來 一九句　惟然坊 一七句
鬼貫 三五句
野水 三句
更 七一句
太祇 一〇七句
几董 六八句
一茶 五〇句

文叫 二一句
西鶴 四句　來山 一七句
懷丹 一句　一笑 四句
夢叫 一七七句(下)　白雄 四七句(上)　蘭
曉甚 一七句　蕪太 六九句　太祇
麥水 二八句　世賜 四句
春泥 六二句　蘆陰 二〇句

千代尼句集　一八七句
露伴評　紅葉　七九句

俳精髄　陸

昌谷文庫

暘谷

漆山天童選

芭蕉

蕉橋て負ふる女機ちよふ

内裏雛人形天皇の御宇とりわ

花も蝶の目もとえり鬼菊

まち立てまち九日の御山うれ

太日桜やしはさきして一変

もみぢ山の紅葉

うゑすの笠ふる雨うれ
留まて来て梅さくらの咲初ル
梅うゝゝりのとりのもる山路うれ
遠水や桃ゆうゝ井のわく
丈六ゝ陽炎ゝ石の上
ゝゝの和や笠人ゝ人ゝ草の陽
春風や人ゝ笠うつゝゝ山
清流て草ゝ根わす清水ル
鶯ちけて花いけうきん二本杉

花曇や二本杉ゝ茶もえる茶の煙
青柳の泥ゝしたゝる汐干ル
のゝらゝ小い芝花咲うゝ小ル
菜畑ゝ花咲うゝ小ル
雲雀ゝ鳴ゝ体ゝたゝけ
山吹や宇治の焙炉の煙ゝ時
山吹や笠ゝさゝ毎ゝ梅の花
蜂ゝゝ一里ゝ小山伏
夕霧の白ゝ和の花架ゝ燒ゝて

横ぶりなるうなぎ
なるたふと青柴わるはの日ぬ老
花山藤の花ぬり風のんみ
一ふりのにて横ふるや杉宇
ほゝきに大竹藪をとり月遍
ひるくれぬを首ふみ赤さ菖蒲
芋のこをを芋ふり花菖蒲
みーうを夜や駒の鈴の音をつく
五月雨ぬ水ぬ清水の柳

五月雨を集めてはやし最上川
入梅をれのわしてあやちまし
きみをぬしるを蛍きをる蛍の光
ふゆ物やの時なるの時の沖黄いろ
秋ぬ人とし雨をりをみく
五月うを山ぬ岩を橋の中
初茶をを主てるや刺ん稲すや
花菖蒲ぬ水て涼し風の流
きふ堀岩をひるる清水小

蛸壺やはつかに見しその月
海の底いくつ冴て月の山
蛤のはしらてたるちつはゝ
糸遊や西へ西へ流れゆく
ひらひらやとまるそこ
角もたやたくを出るのすゝし
蓮ちや伝説
ひやひやと踏てふまれて登りぬく
稲妻や闇の方
ゆく五位の声

五川の水ゝかれて
よ稲の香や
浪の間や小貝に
白魚やきえぬ
きり面のせゝと笑
蛍こて
白蛇ゝ秋の
青くて有
大風のあと

海士の家を出る見れはほのかなり

月かゝる雲や忘れしのころ哉

るのしくも笑つて暁ふけ

吹飛ばす雲を浦辺の暮風一つかな

こや旅人と休ふ月見哉

月もなし柿を雨にさわかしき

鎖明て月さし入る浮世哉

米ふみしたとこそひの月の宴

名月や灯達よしや雲の際

名月に鷺腰まくる干潟は

手洗ひせくてゆかしき夜や窓のあら

名もなき洲も月さし込み浪の上

月すゝきや瓶挿の花汐の代

あし沖て如中りくく碁汁

松にもみやしらん花葉の一ふり母

雲かゝりて柳の木秋も中むかし

菊の紙咲や石風の石の間

琴の音や古物座の灯の菓

赤ゝと日はつれなくも秋の風
牛部屋に蚊の声弱し秋の風
乳麺の下焚たつる夜寒かな
枯枝に鴉とまりけり秋の暮
小野炭や手習ふ人の灰せゝり
今朝の雪根深を園の枝折かな
笠の松や晴らしむる不二の雪
雲の日や経の雨織りくさき錦
山路一井寝よもるこゝしめん
煙一丹やたちまちゆく螢の露
鞠壺り少将のるや大把川
風り岩吹とこう所形ノ湖の風
水仙や白き障子のとも移り
寒菊や粉糠のかゝる臼の端
葱白く洗ひたてたる寒さかな
生ながら一つに氷る海鼠哉
箱根こす人もあるらし今朝の雪
ことさへ誰る雪つあしゝふ

大ぞら　遠ひとり住義の
和ぞやこけうつるさま　松の上
花すゝうや　水らまるいさの家
明ゆや　ねさはの家のみわらし
石山の石うゝはるる　霧ぶ
ひさゝ　雪ひとさ　なるかぶ
すゝきて　已こう　棚つる　大工の礼
清閑や　涼　蕨こむ　青　好　茶
おりわゝてやゝてやすき　鶏　冬

其角

六波羅や　蝉　椿の　葉の　音
山吹や　蛙　飛込む　水の　おと
百人　ゝ　かよ　こば　蕎　ふと
うすらひや　僧　ぼけ　芹の　花
海ぶ　蕨　梶　なぐ　水の　礼
松ゝ　やまは　こば　蝉　来ぬ
子　袖　墓　ゝ　せて　梅　見ぶ
ゆ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

其時の天氣さいのて 稲下し
たのもろし 俤さわらす 山梨の
かつしかや 江戸とはかきわ 風
形起こして 鳥さへすゝ 雲間かし
霞きえて 花二月 裸さ 雪肥えて
駒こめて 雪ん 傳く 蕗のたゝ
水香と 白帽子 いきせ 岩つゝじ
紙鳶の ゝりぐ さよ 三ち歩
綿ゝりて わびは ゝり 雛の顔

殿の雛 清水 水殿 一目 ゝ
沓足袋や 鐙 ゝ 初櫻
花りゝて 春書院 月 代
きり 角 ゝ 春 屏 腐を切て 拾てばや
ゝかし 蛙 鳴く 海の 春の 数
景 ゝ 定 ゝ ひろふ 田螺
駒 足 絹 ゝく 音や 更衣
院歳 ゝ 味 絵しぼし 竹 字
六阿彌 陰 て 鳴 ゝむ 竹 鶏

ちりと擔ちはづれて石規
前の花や房うつ山の老のくれ
柿の鐘めづらし牡丹に
殿造りまびゆゝし桐の花
等や丈山の鎗のさや
みしかの隣へはすぶ蟬の音
さめぶれや湯の樋伝ひ山雪ぶり
木蔭や柳根付のふれ太し
夏川の蛍を仕切り簀ぶ

皆つゝり業ゝつゝ寶の蚊遣の孔
蚊遣やひ蚊帳つゝさゝ克ひと足
蝉よ啼け一日鳴いて夜の露
夏木立蔵池上の破風子十
夏の月蚊を拭りして百両
麻蚊や赤をへぐさつる水ぐるま
百合の花折ゝ先ゝつぶさぬ
蓮の花や金魚よかゝる伊豫簾
涼蔭よとてあるいてゐる土用干

夕ぐれちかき法華堂うけつゝむ梅のぞき
白雨や叢ちひさき草のはら
ゆふぐれや栗屋とぶよる燒原
山の端の雲ゝ紅あつまるあつさ哉
鶏頭や ちりのこりの黄ゝ咲ぬ
丈山の海ゝ見あきと涼ゝ哉
見ゝ人も すゞみ灯籠も廻りゆき
煙管萩や 分限まるゆる 鶏冠
一長に 鎖をゆろしてをどりぬ

萩すゝきむすび分けぬ ササ苅
醤油ゝむ小屋の塚や 草の花
西瓜ゝ 奴の 鼠のあれ ゆき
山陽の 芋ほりあとの 伏柱
杉 ゝ ゝ 狐 ゝ ゝ ふしぶし 友もる
すゝ月や 鮭をとゝ ゝ きりす
沈象や 明ゝ 遠ひよ ゆ山ぶし
山原女や 紅象ぶ たゝく 麻の 瓜
秋ゝ ゝ 庵上の 杉を 殺れたり

猿の聲木々の梢や秋くれ水
更らと禰宜の鬱や杉の月
ふかれて藤の遠白し峯の月
津師沙彌相剃きて月見かな
名月や畳のうへの松の影
笠さびし菊の交むる佳きたらず
松原のすき間をぬけるはすの露
かるびしさ三井の仁王や伏木立
山本戸や鎖のさゝれて冬の月

懶まれてなごうぶる人あるの幅
鍛冶隠者たづね畑の蕎
蕎麦や富士の霧のうけどころ
使者いとり書屋へ通る冬ざゝ
越後屋の冥登道ぎゝ中ちどり
初雪や寒ゝ見すゝ朝朗
初雪や湯のみ所の大銅壺
叡慮の人ゝ多ゝ冬
温飩屋へゆく念佛あり夜の雪

千鳥たつかの長川こゝにて鉢叩
あくつきの笛吹くたつや空念仏
節季のしりやロをとゞ閉ぢくるあくし舟
枇杷の葉花に形おだ笛なき蝸牛
時雨る一二の枝の葉の風吹るれ 逆俳
うぐひすの文は逆ふ初音哉
あ柳の糸は柳や三日の月
故やりやや故帳つるるた老ひとり

嵐雪

元日やけふ雀のこゑのうゝり
元日やそらゝ雨くいのぼさ
五十ゝ四谷をゝくゝ紀の玉
節あげてくゝたち買はむ新まぐさ
雪の宿とゝゝる小梅所
梅一輪一りん程のあゝ一つさ
うゆぐひ女の敬うつくゝ哀なる
手あるの師を車屋や花う見

亀好の造りけり花ざうり
女中方 庭前(にわさき)の花の色遊ぶ
葱鹿とおもひて新樹の畑うか
大勢の中へ一ぱい かつをうり
ちちざるの七ざくやうの事さらす
子持ゝ鮒すみ紙のとりぶ
しだら屋の長屋こうり蕎麦ぶ
文もかくはなしする粉屋 把
衣ぶくろ ゆりの見えぬ牧遣ぶ

蛙いちごまら提げて夫婦づれ
夏の日の懶き餘のもやぶ
すぐろたつ羽黒のさぐち夏屋花
石塔をなでゝは休む一業うれ
七夕や賀屋へ入れる生車
鬼灯のくすだぶつぶち勢ぶ
青蛙の吐(ギャッ)と鳴さつゝけふの月
早雨ゝ吉名月の雲はやさるり
はぜ釣や水村山廓酒旗ノ風

岩は伝る菊もそらにつく籬ぶ
おもかの足で果とぐるるうれ

丈草

もち面やめけ竹さまくの粗笹の穴
真先ゝゝし枝ゝむ散ゝ梅
木吸や枯ゝをさゞすゝ花の少
呼ゝを絶ゝて夢のさうゝれ
白雨りゝ去ゝりちゝゝや竹の蔭
突立て帰とゝる神や涼ゝ舟
行燈ゝ飛ふゝや秋のさりゝぐゝま
脱殻ゝならゝびて死ゝる秋ゝ蝉

鶏頭の並びて迎ふや笠の縄

雷落ち枯野の夕日赤

幾人か田を駆け抜ける橋

水底の岩を落ちつく木の葉哉

狐の声そろふすすきの穂

淋しさの底ぬけて降る霧哉

[illegible]

[illegible]

水風呂に笠しのけて谷の菜

鷹の目枯野をまわる岩の穴

[illegible]

[illegible]

着て立てば蝶の会もあるはせ

杜宇なるや淋しの山ぞ

曽我之

吉原

若葉つゝ藪ぬやゝん さん俵
うぐこくもゝ ぐ畑〜つ男ぶ
郭そなゝ〜や そ者と ゆ〜みも
毛ゆ ら 顔ん会すや ほゝ〜ま ん
自楽の一 廣ぬ家ぐ つ ゆし 花
朝ゆ水ゆ ち ら ゆ ま ま
浅茅生や ま ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
早稲ほすや ん ゝ ゝ ゝ ゝ 山の見

高ら ら 唾の ゆ は ゆき 月ん うれ
名月や 椽と ら ゆ す 桑の ら
月の ゝ ゝ 我 里 の 蕚 た む
庭先や 空り ゆ ゆ ら 鹿の 冬
朝 ら ゝ 天 富 ゝ ゝ 浦り 多
杉苔や ん て ゝ ゝ ゝ 鼻の 七
柳 買や ゆ ゝ ゝ ゝ ゝ る 真 桑 賣
山 蔭の 里 う や ゝ ま す ゝ ゆ ゆ る
鶯 と と い ゝ ど や ゝ ゝ や 雪の 門

絵の中にみてうんとうるさきの山路かな

雲隠れ行くや夢路の月かげ

うの花の隠れ家かしの音の門（炭俵）

惟然坊

ねの花あの月明の下ぼうげかな

芹なづな踏みたるあとの花

風ふかぬ日のうらうらとなのちよ

山吹やあのよりさせる花の歩

若葉やく風さらさらと吹きあぶる

物ごとなく蝶子ふる書寝ぶ

蕈葉やひと鍋へうと湯のひま

夏行くや水田のうへの天の川

踏り碎す窓に吟ずる竈馬が
迷ひ入りて別れし業ゆゑが
物干竿のびたつ梨子の兵杖が
紙の蔕の白き梢や冬の山
見えばせて竹の林やみそさざい
煤掃や折戸數一枚ふさぐごく
節句の作や畳へ鶏を追上げる
けふ明り寺の時雨ゆゑ
業の穂をこぼして鶏

西鶴

つく羽子や擬寶珠を飛ぶ牛若子
雪の峰山見し岡の拾ひもの
元政の軒ふるたる藁の礼
大晦日定めなきこの世のさだめ

来山

有撫を今ちゝはゝの今朝の春
なもとゝと云つけて赤い若菜賣
両方へ髪かあつる猫の恋
春の雨や巨燈の水くゞる朱の子
やぶうらゝ水へ角孫ぐ田螺のこゑ
見やとゝかゞ空し日暮の山猫
竹のうを竹のうを竹の咲

水踏て草で逆ふ蛙
柳の月枝へうしはづしたる
蛍うつし蛙へ奪なれず
あさやけや赤さ十月の唐黄
干網へ八の字あつめつゝ
何の役へたつでつゝ時うれ
むしつゝは拾つ春の草
出ずとおいとかばは人へ鶯かな

鬼貫

鶯なくや炭売の宿

一鍬や折れもせず菫草

柳の糸菫に乱れ

うたてやな乱れ糸

咲くやこの花の名は

皆さくや松の枝

蔵なや帳つる長陽の池

五月雨や辛都海の河を飛ぶ蛍

鳴やはら島とうるさる蝉の声

行水や竹の蝉なく相国寺

さはくと蓮うごくうす池の魚

なんと人の暑さよ石の塵

あの山もけふの暑さよ行方

冬はなる夏がてしたと言ひ

稲妻や海の夢三右が水車

ふむ足や美濃の道に行く草の露

行水の捨て行るさ蛍の声

荒〻と取散しぬる落葉
にまつぽうと秋の宮るふこの山
名月や兩戸をあけて風入る
古寺や雪とうけて榎の下
木ゝもいなず坂ゝ小さき榎の実
さゝ栗の栗ゝ栗の栗ゝ小春び
参詣や姉ぐ湯を待つ類ぶる
枯蘆や雞鳴波の寒さ哉
ひゝと風を宣行く参詣

沙弥や手を洗ひて残して帰る
水ゝるゝ井のすゝの古くくて深さ
井のすゝの古くくて深さ
何ゆゑ長み朝はさやや
人間ゝ智恵ほどあるいあを
霧の中ゝ何やらゆゑの車
伏見人唐委をさぞ
兼平ゝ塚淋ゝと川風

維舟

順禮の棒ばかりを見りく夏野ぶ

一笑

夕顔よ馬の顔如す櫓綱の孔
見ずに行く庄新墨を磨ぶ
戸敲きて用いなかと月夜ぶ
吹くなよ懐ろ直る柳の孔

野水

行ずに微ほこりて常の草
杉ぬるよ山吹の花の色
一すぢは櫓よりよ好き世ぶ

夢村

三柳の雑煮やゆるや長芋ぶり
雪のうちちちとすりやかぶうち
うんひすの餅相のうきき初雪が
青柳や芹はうの中すりけ中
出る枕をうたうとしたりや柳が
源八をもうりて鶴のあしじが
極楽をあどれがあるやうあぢややら
えりとりに徑尽とりとり芹の中

蕪村

古寺や ほうろく捨る せりの中
春月や 印金もぬの 木の間より
梯や 寺を出る 胡地の雲
子農舟 のらぐで過 さゆく 雲ぶ
足ぶみして 濁る はるの水
橋ふ〜て 日ぬ〜 ぬしんとする 水
春雨や 人住みて 煙壁を 洗る
物干の 袋ぬ〜ふ〜 つもるあめ
春雨や 小磯の 小貝 ぬれ ほぶし
海ぶ 蜂 を 呼ぶ やもの 雨
春雨や ものもう ゆく 蓑と 傘
紫陽の 沈みぬ やて 春の 雨
はるさめや 綱ぶ 袂 ふ ぶ ぶ ち ん
五人の 庵 ふ ひ ひ く つ ば ぶ ぶ
合歓 ぶ ぶ り ぶ ぶ 雨 ぶ 雲 ぶ
ぶ ぶ ぶ ぶ 京 ぶ 見 過 し 夏 田 に 夏
雁 立 て 鶯 破 田 ぶ の 戸 を 閉 る
鴈 行 て 門 田 ぶ 遠 く ぶ ぶ ぶ

かげろふや簀の上ものづる人
ほろ〳〵に雉子のうちもの宮遍が
奈山さ面しの大工やきぢの雨
ぢと起きて雉追ふ犬や寒雨
妹が垣根さうみやせん草の花咲きぬ
紅梅や比丘尼寺
垣越さまのうちかく接まが
畑うちや法三童の机のもと
遅きはや雉子のちりみる梅さ一

春の雨降りのうち〳〵かれ
島〳〵つや島さく帰かる山かげく
大津絵く蕎麦ゆく遠くれ
片田ぢさうやもの風
関よ出して京遍き峠をきく鶯が
日はくれよ夜は鶯けさ帰く蛙
連歌してもとゝ雨の蛙が
獨鈷鐘首水の鶯のかすづり
時〳〵雨やすぐ〳〵の夢はら

かもすゝ高なき面や程信
しのあゝ小面陰出す焼野原
山吹や井くゝを流し鉢屑
野と共ゝ焼る地蔵のしきみ
風さゝのの宿のありどゝろ
やぶいりのまゝいでるざゝの風の糸
剣力は徒くゝ見るぎゝめ山場
旅人の鼻もぎ寒ゝ砂ぎゝ
阿古久雪のまゝふ蔦蔓

かゝれ任て花ゝと眞面ゞ偽うれ
笠士の蓑やあゝしの花衣
花ゝ蝶もじ物ゝさにくゝ白梅ゝ
花を踏みし草履もゝて初春ゞ
花の幕蓋好ゝを覗く女あり
花ちりて木の間の幸と限りにゝ
甲斐ゞわゝを こゝかれ桑の花
菜の花や月ゝ東ゝ月は西に
なの花や竹尹ゝ見ゆゝ小風名數

行春や鳰の海なる筑波山
浦を討の夫婦なりしを更衣
ほと〳〵ぎす平安城を筋違に
ほと〳〵きす待つや都のそとざくら
牡丹散てうちかさなりぬ二三片
寂として家の絶間のぼたん哉
地車のとゞろくひびく牡丹かな
短夜や明石の浦の川千水
短夜や蘆間に月の沖の波

短夜や張うち張の提灯
短夜やいとまを給る白拍子
短夜や伏見の戸ぼそ淀の窓
卯の花のこぼし蕎麦哉
不二ひとつうづみ殘して若葉哉
若竹や橋本の遊女ありやあし
旅芝居穂麦やかすりの鏡して
鄙ずまや彦根が城に雲かゝる
鄙つけて誰待つとなき身哉

花いばら故郷の路すがら
越ひつゝ富士のぼれば花いばら
青葉より眺あつめて美人かな
夕風や水青鷺の脚をつ
水深く利根川うすき茄子哉
しのめや霧の近江の麻畠
湖へ富士をもどすやさつき雨
さみだれや大河を前に家二軒
さみだれや俤の比叡を脱てる出る
山国の五月でも今日涼しき皐月雨
水桶にうなづきあふや瓜茄子
おろし置く笈も濡るる夏羽織
物干の神のうら造ふほとゝぎす
蝶いとゞ身を古郷に登山かな
石工の鑿冷しぬる清水哉
書がほや この道唐の三十里
飛石も三つ四つ蓮のうき葉哉
白蓮とゆらむもしぞ思ふ俤のさき

河骨の二もと流るゝや雨の中
雷ゝ小やみは焼りて風の花
弓取の帯ゆ細さよたゝるもろ
細腰ゝ夕風さはるたゝずもろ
蟬鳴くや僧正坊の湯あみ時
白雨や門際ゝの人だまり
揚州の津ゝゝゝゝあてゝの峰
羽蟻とぶや富士の裾みのふもと
詩みして妻ゝを辟ゝる暑かな

秋来ぬと合點せしる遠かれ
擬ゝの葉ゝ朝顔体まのしをりか
魂棚をほどけばすゝの座敷か
相阿彌の宵寝起すや大文字
四五人ゝ日ゝ為ちゝる踊りか
柳散清水涸石處ゝ
まゝふゝ露はしひりく弱これ
牧倉の露ゝ地のゝゝうつぼか
身ゝもや亡妻の帯を濡ゝ踊む

初雪や水仙の市の音
日は斜め関屋の鎗のうらんばかり
月天心多賀の町を通りけり
名月や鬼のわらふ波浮の海
一行の雁や諏山の月を印す
かなしさや釣の糸吹く秋の風
順礼の目鼻書きゆくふくべかな
三徑の十歩尽きて蓼の花
甲斐がねや徳蓼の上を塩車

釣りおろし鱈の一巨口五や吐く
鳥羽殿へ五六騎いそぐ秋の暮
門前の花屋よ蕎麦食る秋の暮
白菊や昔思の空を埃の下
西行の面影出て有る秋の暮
ゆくゆくるる後ろ姿やまみぢ
雨乞の小町が果や荒れ水
起きて見てもいふ事寒ぶ
雅子の寺るつくむいてふぶ

草枯や頭を挙げば峯の月
鬼貫や新酒の中の匂ひ哉
栗そゝるゝ恵比寿の作の彌陀佛
いとゝかなしひの色れめ哉秋
柿ゝ形を節さめてすけるゝ
ちれたるを蔦ゝ紅と十の葉
口切や小坂下るゝ只ゝね
炉びらきや雪の中の数酒
磯ちどり足をぬらして遊びけり

水ゝと舟ゝ菜ゝと沼ゝの女ゝ
早稲ゝ刈ゝ沖ゝ出ゝの里ゝ賣ゝ数
千羽ゝどゝの假寝ゝ引けゝり柿屋紀
飛騨山の皆ゝ色ゝ
掌拾ゝて猫の飛脚通りけり
馬の尾ゝいばゝらの枯ゝ
蘭像ゝて石ゝ日の入ゝ枯ゝ
待人ゝの足音遠ゝ
西ゝゆゝ恵ゝたゝ

うがらしや何と世わたる赤子軒
木枯や鐘ふ少人を吹きあてる
錫ほしげて信の小姫を雪の人
初雪や宮の揚屋の紙豆汁
初雪や剣を掘るつくべ縄
宿うつるや火鉢の赤つづき
霜月や母中と我月を領ず
頭巾着て京うろうろの御法師
新右衛門殿を待ふ冬ごもり

葱買て枯木の中を帰りけり
易水にねぶかの流て寒さかな
木のはしの根ふるはしたるき
花ゆる長太寺の君あり鉢叩
西人をもてなすはちを敲
炭俵のひさじ火桶に並べる
一しきり矢種の尽きるあられかな
玉霰霜毋が鍋をみぐれうつ
古池や蛙飛こむ水の音

寒月や門ゐてくらの天ふるし
寒月や鉢岩のあらはさやま
寒月や枯るの中の竹三竿
寒月や衆徒の羣議のうきて後
寒ゐ炬燵や上の御すまうりけり
御經よ仏てゆうさよ古暦
年守るや乾鮭の太刀の棒

闌更

元日とおもひの外の寂寞
元日や松しらるる東山
見るものは色紙ばかりの春
寂寞や首のみしかき餅太夫
正月や猿とのせり米ふるる
草ともに氷流るる川水
うとうとと片袖めくるもの風
かげろふや旅人ゆるる杖の先

かけろふの一絲につゝ土くさき
春雨やのゝ字の廣
きゝ馬や伊勢路見ゆく雲の母
きゝ馬で雲の関屋く藤の中
庵の雪さ花なりてもの水
若州や白ゝ雲かゝる海あり
おさくも藪ゝ炭俵
島中のおゝく灰まく男かな
関の戸やつくばさまゝ雨の芝
芝のへや物ゝ咲ける牛の角
蛤のこゝろ　のこる干潟や
蕗ゝ咲る角ゝ咲ける如蕗や
山陰し花ゝ如のゝ咲ひ蕨
海棠や白ゝ咲ける玉簾
かゝれ家や雷一本の花登
ゆゝ入山吹ゝ咲ける猫の家
山吹や花ゝ咲ひそまる川烏
つゝ人ゝ咲ける茶園や

芋お短夜や波打際の幸篇

新さらさて秋らしくさみる国原に
夏の雨やそゝがれ雲の月はすゝ
新さは新す出まけ牧蛍の風
下蔭や紙帆の舟まで鉦の音
花まゆて花もこつまく牡丹に
三三たけしつゝゆき弱法師
更行や蛩を這ふ町の舟
うらなしの門柳やるりほゝ
蛍の雨の軒ゆけばふりに
うちもゝす虹の下なる金殿哉
はつ蛍の売るなりひて鳴まけ
迎水やなるゝ水鶏のこそはけ
夏川や岩よ漢火の燈籠り
百夕の虹ゝつゝ寺のうしろに
夕虹や雨の晴間の青田より
朝川や水涼まるきりの舟
秋風やいつこへゆきし赤ヒレ袁
辻ゝつゝみしるる枝梗に

萩原や花見に付て分出る
はつかのとんぼ飾は足晝の辻
噂止て寝かさつ行谷間哉
明月や在郷のまつかとち乱
涼こゝそ芦の穂さらし藻屑かな
冷気静て竹の中なる清閑寺
みなとや法より付する油筒
木枯や西山あさく夕つく日
おれし色を重ねて雪の山
枝くれて比良もみえしや雪の竹
しつ松くは積らぬものか雪の松

（若井此上 承振汀東之 原下墨 炭とあり 汀一口言）

冬ざれで足にこたゆる貝の殻
ふゆされや黒かに流る鍋の墨
折沈む竹のうへなる氷くのれ
氷みり寒のしぬ稲の臥もしま、
いと挙し筒も氷れる枯欅
橋の雪往か落して炭二つ
赤うと雪おしみりゆき暮香の堂

寒けさや古物屋の毛皮の形
富士や筒ぬけ洗れる水仙苑
ものこゝろの寂るつゝ
冊子之のこゝろ
ゆく春や帝の
鶯や春の笠ゆゝしく蓮道
木兎や何きくたゞ事もなく
こつこつと咳まくや絶ふすま
竹賣
新文ゆり鉢叩
すゝ掃や渇る深の毋なれ川

白雄

長きりや雑はつゐに犬はある
海ゆかれてまをあけふる蛙
於泳悦このゝ
磬鳴て掃きさうもなり
土舟や蜆こゝろ
脱すてゝ蕨
木はさみの白刃
影やみる水や

白加

和歌や笠置越なる梨の花
みしかぬや直宿笠のあけぼの
明易きあを法華の病うれ
放遣火のゆふけぶり
鶏の音や魚とりあぐすま漁火
その海きのふ人もあり
梳すくしまもりすすしさや高の河より向島
人のしる蛍やまち嵐
ゆかさや流れ出る谷の水
出干や雲ふくき松ふくり
宿寒や何ぶし磯ぶは漁河ある
草の原きりぬけて蜘の田白し
秋日和島さしなんと通りけり
寄すなり覓の口の桐一葉
何とくむ桐の一葉のから
両鄙春て月ぬるもりす
面なつさや所もかくす菜三出

世之中や文のあはれ母の新
小雨中や雲くらしつゝ夢心
名月や建さまつるものの花
かゝ稲や あゝしあはれ秋の数
門くや 猪も宮めず 空捲す
雲の峯いくつくずれて 荊棘か
引すてゝ車の数よ 雲の空
薄 冰 雨ぶちと 遠すぬり
鶴の背に 冰こぼれて 蒹葭か

冰る 雨や 諸 ぬかるゝ戸の走り
埋火や 鄙の中のほのあかり
炭竈や めらめらとあれし 篤かつら
地車の轍めは ゆるる 枯野か
猪の 篠根 埋 吹かれ あるか
撥ひゆく 沽 鯉のそく 枯の江
蕎麦 赤る 蔦 赤るまこと 杉 葉か
いろ〳〵 遠 ゝ ゝ 屋 賣
寒月や 石切山の 石 佛

寒月や崇めまつる形代
掃うらに出でつれめる夜の煤
雑 捨てきつるうへや鵙のこゑ

曉 基

おもふまじ河はやうく勝ち
海苔やせ流れ量り拾ひ枕
すみ小橋のばちにさきを毒の心が
かけろふゆうまいしのひとへや
葛の葉恋吹伊勢物語
ふることのさこうてやるく恋
雪降れの月れるるで おくれ
きうくが踊前にてうたは

[illegible]

[illegible]里の高灯籠
[illegible]の[illegible]中寒さ雨をみる[illegible]
[illegible]れひさ[illegible]屋根のすかひに高火焚
行燈に菓鑵鉢[illegible]
縄[illegible]に[illegible]つる[illegible]
[illegible]川や籔に[illegible]
犬[illegible]
[illegible]
かひつ[illegible]

夢太

元日や雨に美人の高軒
[illegible]
雨[illegible]
[illegible]
粥杖に信車[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
百姓の[illegible]

あら馬や心のままに春の氷
行くとなれば香の物の花
香をつゐて廻りぶくもの物の花
物なれば空さ入りの
城跡や踏そつかつて物の花
出つくしもれば庭の物が
二河三河最後の物ぶきが
活てくるの物さあちら向れたり
芋の葉そくなりてかれけり

鳥の巣や鍵の錆付く家の雷
半ちゃ物追ふて仲間ふれ
稽ひとり燃て人ふし物の花
世の中三日月見ぬ間に物ふれ
ゆくものは幸のもの山物
をれしと物せて花のあるもの
傘さして物ふ花の物が
皆清水花うつて物ひ急
ものやはみるみ花ふるもの

[illegible]
聽の跡を問のあらしに
人こゝろ[illegible]
酒桶の背中干すや桐の花
竹のこや[illegible]
竹のこや先篠ちるて蜘の糸
竹植てなほうゑ[illegible]
蕚で持豆腐[illegible]
すきりや和根の河面何十里

遠[illegible]
淋しさや煙[illegible]
傘[illegible]
[illegible]
五月雨や千[illegible]
[illegible]
三[illegible]
耳[illegible]
四やけ[illegible]

大津絵の舟のうへ　景さえ
絵　苔の色　松
松ちやうの　はしめ　軒の雫
山　ひとつ　岩　色　田舎風
色　赤かぶの　ひとつ　駿河
迎ひ　舟　新戸のひとり　明
金屏　二両　いく　みわか
り　て　ゆ　五　首　水
名月や　汐満　れ　ば　さ　れ　蛍

明月や　月　ま　ま　な
月や　生　愛　ら　小舟
二羽　こ　か　へ　一
旅人　ま　ま　駄む
酒　買　り　り　菊
美人　生む　人　ち　ん　の
ろ　い　ら　や　ま　ん　の
寺　の　絵　や　あ　る　あ
死　こ　ち　ち　て　る　巨燈

更ふる雨や炭もて炭を砕く音
かりやりんとはげしきうめき宿
寒菊や水屋の水の冷え
牛の屋の匂はうこうの枯野かな
屋根へ（弗）佛でぬむ十夜ぶ
白雪の中ゆ雪ふる寒念佛
いさかふて所もなしや寒念佛

太祇

日を明けてはてしなきかな冬の春
七草や餅の中ゆ出るあり古き
初富士や餅屋あるべき山ひろし
春駒や男乳あるをなの子
菊畑やめしのふるつ竈の前
羽つくや用意をかしき立ちはの
竹山やしさりをとりて殘る雪
雪門や僧のかやしく立てり暁の梅

太祇

なぶりそと折りて枝豆の
粉みける絹の袋の
清なる蛤乾しく餅
色こそ
九重八幡の弓矢
連翹や蕚の衆の屋敷
矢粉棄る蛾の春の風
春風ここすや駒の綾蘭笠
人言のこけむ水

つみ草や背の負ふ
出代や
やぶ入の
陽炎や
かこげる
盗み
秋風や川のやうな
やさしやる四を
見よ芝ちりと

七月

木立
母の側
ひとりぶ

ゆうけんや人や遊子花
書きすて歌も腰折小国扇
尺をなのつむる鉢の国扇うれ
蝉ごえ柄うち考うす国扇ば
扇とうちへすてなしの国扇ば
折あしと角をさすり蝙蝠
出干や庁山里の杉思節
たつ姫のあり所すはづみうれ
やうびるのそこら編て書あつれ

白雨や五ざしにもつ芋の毒
見かけゆく蕎麦の高灯籠
蕎椒畳の上へはうりけり
行るし夫婦珍来客の秋
留守の戸のみや客おの中
鬼灯や掴み出したる神の上屋
鮹遠ば俳をはうや芋畠
雑頭やはつれさき鮭を天窓賜
恰のいに椿しばりなるとんぼ

蓬の頃おもふ人なき住みうれ
隅川の水も吹き散らすみぞれ
狂はばや こころに月見て又かこ
名月や花見てあるべき門の松
うゑ来て好る庵外しゆき月の走
身よりよりの身をの夫や小夜砧
海鬼の海へ来ていふ声寒うれ
ねりうるおバ灯のもる燈や苔かつら
又ひとつをせる山雀や雑ふべ

雨の音や 烟草よ雨を呑く庵の隅
行く秋や 拾はばあるべきふ時頃
冬籠 窟さ暗ゆくゆくの多少ト
冬籠や 蕎麦の有りく戸樋の水
秋寂しのるて門びの多ふ十秋ト
冬籠の 星をよりて 寒さ
何鳴くの 人の寒の人の俗俳ば
冬仙や 脂衣を知るこの義
住身やこ つの五七の言

きゝ月や秋ひとしほゆく物ゝ云
かゝるを知て きゝ日かな 正ゞ門
父とゝ ゝゝき 榾うゝし 蛭 ゝ
夢 鶏の戸へなほりぞ 煤 拂
ゝゝ ゝ ゝて 雨ゝつきゝげし 野 端
山 ゝて 京 ゝ 風の 麦
 撰 採て 筧ゝ 洗ゝ ひとり
伸びゝかし 麦の 苔の 嘗ぞ 先づ
ゝゝ人の 帯と ゝゝへゝり 杜若

あゝ ゝ蝿 ゝ ゝけり 蚊の 腹
 麦を 打つほう ゝの ゝ 聳 雪
泥の干る 池ゝ ゝ 杜若
うつゝ ゝに ゝ ゝ ゝ
 雉ゝ ゝ ゝの 別の ゝ ゝ
 蝙蝠や 千木ゝ ゝ ゝ 空
 早乙女の ゝ ゝ ゝ ゝ
 岩角や 火縄 ゝ ゝ ゝ
 あゝ ゝ ゝ 麦の 穂 ゝ ゝ

田園の後さびしく風ふく
草の戸や竹植ゑ立て蛙鳴
角生て這はじやみなる蝸牛
朽葉を孤人茅屋暑し
ひとりそいうて立ちはたらぐ
屋根苔耳いろ
刀豆や のうしろ花ゆ
茗荷のうしろ
鉢の子うりに
つ陶や今年米

表うら出し告げ来る十三夜
水仙を生けしやそもそも
水仙や昔の上り横ふし
十月の菊の
下戸ひとり酒
木枯や大津
起きさうなを
犬ふつつ石の
茂栅のらう

ちかりし柄杓さしまし氷一つ入れ
あつまる水をへ入れの氷一つ入れ
かみ量やかつへ相撲の肩の上
髪おそやうしろ姿をおつく
さぐるの天秤棒や大根引
組板と這ひくゝまる男が
二階へ土器投げやまつぼし
す掃てそろりとひらく持佛が
すぼるの中へ使やひねり文

麥水

門松や四も七つの孫と逢ふ
都まりて陽の入の暖の懐紙
入り兼ねて見る原の汐干潟
梅咲くや行燈かくれの夜氷
月ひとつ水へ掃きこむ卿が
苗代や角力は京へ出つるみ
日暮れの乾鮭うりの蛇の目
門に待つかよの大伸や蕎の花

山吹の水に影やうつる月
一筋の柳の手ぶりや田に雨
朝虹を伊吹に清し五月晴
衣張て乃中乃乃ぬ乃ぬ蜂
雲の峰海をかすめて孤嶋
月ひとつ義仲行くやきみ川
山梔子や菖蒲の前れ咲きかすす
夕顔や駒の出てふ引く頃つづき
風菊に雲吹きやや湯のいきぬ

麻州や蕈に蕈を落てから
凌霄や郭の上つる手水鉢
山時雨茶船をなして行くる
卯こ柳をそ深ぬほうろかれ
姉をふすぐ返して野やりぬ
陰のすけて男はうれしぬ富士の色
鞍馬こうの奥へ人やる木の芽ぶ
元山のさくらすつじ川
ものとへをる僧はうぬ山桃の花

芭蕉や人はあるじの色ざうし
湖を墨へひたうる青田かな

芋腸

雪とあるまめ箸とほそかたし
海苔雁干すもかるく樽の入江かな
桐の葉ふる硯はつこう墨の巷
山賊やあるかなかりの貸蒲団

化董

かるかやの穂の中のうら懐にも
耕さしかくるくるくるくるくるくるかな
さるかの柳や一加弟の雨うの水
ひるかの二ツ大伸の柳かすみ笠
柳びえ蓮もしこ言てやみの梅の巷
りはえ蓮もて蓮すくるくるくるの水
五春四巷とて蓮の柳やはるの水
絵書紙を鎮おくこやもの風

さとうしてそれ物ゝぐさの風
戯男子道踏ゝかへむ春びろ月
落ちゆくべき西山遠し日びろ
海士の子や鼎の中より紙音
虹の根ゝ雉鳴く雨の晴間か
橋牛や印籠ゝ尼の公
たんぽゝや五郎文かしたる
桐油臭き駕ゝ蛙ゝ鳴かい
うら店や筆筒の上のひな祭

晴ゝとくれなゐ
紀子折ゝ美人傳ゝ春ひと根
来たらば来よゝ笠ゝ紀ぐ
山吹ゝで損じ
白ゝ多や猫さかりの鮎の魚
義路ゝ
病ゝ
短夜や蛸遠ひのぼる米俵
夕立やゝ
雨の花
宿
十更衣
鶯鳥

秋立つや宵の牧笛の露ぶり
四けてはさ鍋の尻うく魚の影
瘧落てあさがほ青し蝸の外
やはらかに人分ゆくや陽角力
第の元り蓋見えぬ屋の森
頻へりて望て誰とさしれる
又平ぶ書てしゆ出で躍かな
稲妻や山城の山河内の河
朝霧や膝ふすめ下の小松原

えんぼうに蓋飛あじうつ朝日ぶ
名月や幸崎の松陸田の稔
たうづうし寄る白頭の爺れ
幾度か碁うちもむすぐこ石
すすまさの弾てゆく時みぢ
男乙女も引板曳く社とかに道
駕舟は島ぬ蓑者の紀
丸丸と白菊を解く匂ひ哉
紅葉やうつてさとてとて

痩腰を前へ進めて行く霜かな
色々の枝のはれ音や葉の音
朝寒に鉈の切りぶり響かれ
あさ寒や水曜ふる家まで起きた
逢坂の町や針研ぐ初霜の秋
杉たつる門の坂のゆるくはあるれ
負柳ぶ歌ひながらぬりや夫婦
ぞわいわい草鞋はさむうせ貝
さらさらとに炭挽く音ゆられ此

あのあのやみあれ
畳もとそる客ふ
吸ぶやもあるれ
水風呂の具ふく
さるるや三つに
昼よあらそふ
蕎麦やもろく
子めば猫やさ
泡水るかさ

の乗る馬の息
寄ふふんさ
衣の中の冬木立
ておやや大根屋
裂はる筑紫川
ぐ帰の雪
折れる芋の箸
の袖屋は
ぬるかさ

桜の角をかくすや今朝の雪
出づる日も風ふく吹くこゑごゑ
かさぶさし　水鶏鳴る盥かたむ
わさまるが油こぼれる五柳居
書の留守ゑ蕙さ凍さがすあるじ
守ゑの水涕めとす火桶かな

春泥

五條まで船をのぼりて柳かな
春たち〳〵音や鉦寺の炭俵
汲鮒やまた山ゑるく水豆し
いづちそ〳〵かくや蛙の居所
幡の佛河へ這入る乙鳥かな
みづゝみの法隆寺くゝつ帽取
晋人の味噌の酒蔵やたうの
大原や木の芽すり行く坊の頭

人のまゝ菓へ奥されつ蔭の子
地車ゆとりく草の切株が
曲水や江家の作若雄ゝ
十津河や耕人の山戸
ものの菓や雄ゝ髪もの一掴
材木の上ゆあらしや山塩
西陣や紅の夫婦の行あゆ
花咲て戻る公卿の草履が
その寺の名はあまれゝ糸桜

やふ人の秋うれゝさ姉妹
折ればちるへきもの吹の陰が
宵月や蒲の花の細こ言
後前ゝ花ゝさゝをもつる
はるゝものや柳の雫梅の蜜
背のひくき木瓜ゝ垣ゝ雄ゝ
つゞ其氏竹板ゝ手ゝ
白雲の根をゝつゝ岩つゞし
かげろゝゝ搭ゝす鶏の蹴が

炉ふさぎや招隠の詩を口ずさむ
卯の花や茶仏に供る字治の里
灌仏やあらぬ許す出る檪
中江ゝしもゝ檪の木の日ぬし
加茂義の御所まさし祭ゞ
十津河や見巡の部具も麥埃
短夜の獲物ゝ見せそ柿の鮓
杜若川ゝ眼く賣屋鋪
新ゝつく蝸の五月雨

百合
ゆりゝまゝ来ゝて涼し伏見舟
ゆゝまゝて拾ゝ蛍の破
桃源の宿ゝ流ゝ毛虫下
吐ゝ蛍ゝ蚊つ蚊帳のいとゝ
つゝ立てゝの蛍
ゝ蛍ゝ蛍
昼寝やゝを運ぶ融通根ゝ
冷し瓜加茂の流ゝ物せむ
長旅の城下ゝ出れゝ灯蛍

老いうせる妻宮ものけさすまも取
秋風や牧原の刀の鉄ぶえ
めてささよ稲穂ちぢまる砂の侵
唐紙に駒や繋ぎ雲の月
名月や敷子奪合ふ上達部
たばしりて荒き鼠の富じ
草の戸の所徳利ふるや菊膾
鶏鳴くや柔すり低き小杉原

家遠し枯木のもとの夕けぶり
仰樂が鍼は空ふる冬ぶり
消炭を挽くに下紐ゆうもの心じ
炭を挽くうる暗松じ
巨燵してそれ思ふ駒の制法じ
大原女は投げ牛してゐるうりじ
蕈かくに寺門をめぐる春安じ
餅つくや焚火のうつる嫁の顔
追儺うるの四方も聞えぬ

蘆陰

福寿草さくや後の土俵ぶ鶴
雨の梅一つ咲て雨に蘆の穂
雁かくる夕やみの雨の中陸
うつろふ雨の遠寺の焼ぶ
埋み井のあるかれる焼ぶ
足袋脱ぐ小石根ぶや蓮仏
笹ゆて一周ぶ牡丹ぶ

鄙の昼ぶや書斎の夢ぶ
さみだれや三線かぢるすもも取
うそぶと旅人あるく河原ぶ
悪僧の天窓冷ぶ清水ぶれ
きのふの雷梢まるまる
眼の涼り臥行くの夏ぶ
釣船ぶ舟あるる西瓜ぶ
境帰ぶ公ぶ吹ぶ
世の人ぶ数ぶ

河内女や千葉よくゝさ宮の橋
我ものと雁うぬ花のつる冬田に
山風や霧ふきこむ馬の耳
菊の香のきのふとは過ぎし紙衣哉

一茶

元りや上ゝ上の淺黄しゐ
初宮へさゝ出す狐面の天宮に
拍子ぬけや盗みやすすと大寺に
ゆうりこもんとして烏と柳に
白猫のやうな柳も佛花すれ
西段むりや夕山かげの飾の笛
鍋の尻ほうなぐるぐる雲河に
門前や牧てつゝらし雲河川

雀のこそこのゆふべ　伊勢ごゝ

雀子や　お寺の床の流しもて

ゆれ帆立て　世話をやうすれば宣

陽炎や　手を下ろ　駄はいて　笠忘

陽炎や　そばやの前の　箸の山

掃苔の　赤元　法やはるの雨

餅買て　箱提　灯や　春の雨

春雨や　蛙のなる　角田川

春風や　ちる　垣根の　赤茅　寝

春風やサツ〳〵と　堰の水溢る

永きはや　なの　延の一里塚

ありやこは　我も　紀ゆ　国よ　ゆ

苔の　姿　湯や　花が　咲ければ　ひらく　迎

此　ゆ　な　寺を　探ぐ　けり

一夜　に　蛙は　さらぼ　さる　れ

夕月や　餅の　中　て　寄く　田に

もろみの　底　る　鳴　こ　て　秋　ば

故　ぶ　こ　なく　さみ　れ　獨　ば

鹿の鳴笛吹くなるけさ
書き改むるほどかくす佛うれ
羽蝶生るとき月出るとき柱か
帰り生でるは此葛の葛をしい
あせつけしるの沈深や夏の月
大鎧ゆらり　と通りけり
やれうつれ蝿ぐるをする足をする
米直段くらくとさがる暑さかな
川がりや地蔵の膝の小脇差

秋風や壁のハマムシヨハ道
其分なるなるを　と悟りうれ
古犬や蚊帳の唄を載し貌
うかりと出る逢ひし木槿か
西国の西方をたに来たかな
行燈を畑の暑さそ碍うれ
蛾捨はうれるかとかぐしかな
勝つる菊大名小路通りけり
まけ菊をひとり見直すタかれ

[illegible]て日向の[illegible]砕ひ　小僧が
大根引　大根ぬきを教へけり
尼寺や二人ゐて大根引
炉開やうつくしく通り過の面
初ざくらや僧の上の小行燈
初ざくらや椽うしろ上草履
[illegible]
[illegible]
[illegible]

千代

若水や流るゝうちに去年今年
万年やもとりとゝ花のまりうしく
仕事するよりをもしろ菜つゝ
梅ゝ書や机のあひ木ゝとり
梅が香や石ゝと紀如ゝ堂ゝ
手折らしゝ人ゝ美ゝ地の和
[illegible]
[illegible]
[illegible]

十七

足弥を男なりけるを聞きて
嘆せしと心て出しさけつはて
花を稀なるの所はるけを
見る人を無おるなりや和歌
あまをなして来て誠なり和歌
拾ふの片動くるを吟子浮
翻ひてを笑てはうり雛うれ
嬉しの夫婦なるを牡丹い
字を安せ若菜つくる連りあり

蝶の言やかりはるの都者るる
涼しさや恥いるとやさるを
紅さいくはもあるを清水い
桂梗の花咲時ポンと跳そな
和尚や面りるて来はるを
多桜やひとり牡丹のあるまり
そつそや義を拾へは宮うる

子規

刀鍛冶は唐土鈴鹿や市代の春
春日殿の子のみに出でうち六歌仙
神宮の例すべきなりけり　一和唐
第四は人くも烏帽子ぞ都鳥
元稚の乳母なくて難意ぞ
蕨とや思ひは別れ姉妹
長安の市とは長し賣小者
あくまで別れ雨ぐ陰るうち枯葉

下見

ちらちらに白屋あらぶへ江のれ
まの波やたふらの所もの船の焼
夢絹の帷春縫ふやもの風
樹間よ三千世界蓋もの風
宇治川やほつりと春の雨
畑見ゆる杉垣伸び春の雨
風呂の蓋取るやほつり春の雨
今さして引舟通まもの雨
ちらちらの加もじ干ちらちら雪解ぶ

雪解の馬放ちちらら部落ぶ
氷解けて古藻の流れ山の色ぶ
市井や面代ゆの魚うり
上総きびかちかちりせん汐干潟
伏して今の雛の如き御契
零落や竹刀を削り接木をす
日一日同じちらに島折つ
畑打や大根紅咲く傳り
墨吐て烏賊の死ぬる汐干ぶ

望より今御
山道や人吉
から四里為て肥後
川内や高四人金谷の蒸
海苔簾茶屋ふる漁村の窓
若鮎の二ツより上りはや
五川や小鮎ばしる西の布
すり鉢ふるの蜆の風
蜆汁ふるや河内の村の境川

水口より茶屋つて来る田螺の風
門ふるる生て学てみる蛙の
鉢屑ふる蛙と蛙と勝と衆議判
信濃路や花ばの替棚
梅林の道うるゆる水田の
温泉の町ふる高き高の
梨花して花ゆるる蓮畠
両側の竹藪長一面蛙
花ちらさら路の蛙の

柳水が雲附き上りの橋に
連翹と一面長の机これ
山吹の葉や望の高し水
川ちらと見えてつゝなる柳に
橋落てうゝ沖さ柳に
史家村の入口ゆる物に
唐人の辛夷よ重く生興に
下州と葉深くなる小松原
野さゆかぢけん東のすゝ

木をつみて夜の明やすき小雷に
すゞしさや窓ちらつくすゝの声
海鹿の秋さ水沢の早これ
五月雨の隅田見えて出る戸口に
山門や木の枝垂れて五月雨
夕立や一こゝすゝまりおちの下
夕立や雨戸ちり出す下女の数
雲の峰白帆南さ辺かりさ
焼かり海さ鄙や市の峰

絶壁の蒙々たる清水に
夕風の響吹きて飛沫す青田に
物干すや屋根より垂るる蒙蒙の汗
殷殷として風流や冷し瓜
稗苗や百姓鍬を休て曰く
行水や流れとして夕こゝす
蚊をこゝにいとはさよ宮島
古宮の松長戸や月の蛙
西日さす地蔵の笠は焦がれ

洗車こゝにして烟つゆく若葉哉
盤石の鶯生ずるかとうり 若楓
大釜の湯気立ち上る栗の花
城跡や麥の畑の桐の花
菜畑や水撒車片よせぬ
山吹の返り咲あり夏麥村
百姓の塀ゝ窓ある蓼このし
苔さくや根笹の里の焼木屋
昼蛙の咲くや砂地の麥畑

凌霄や一つ〻垂れし花づら
家毎〻凌霄咲ける温泉かな
凌霄や温泉の宿の裏二階
妻の秋あり〻と思はれぬ
行列の槍五六本秋の〻
麻刈りて名のみ山は雲もなし
牛部屋のかうひと包ゆるさび畑
萱葺き〻雷遠き日のげこの頃
瓜の苗茄子の苗や市の雨

河骨の花起直るさでつまと
蓮の花やかいつ〻池出鍋の蔓
蘭の花や小田もなくあ溜り水
杉の花〻蕎麦の花揺ぐ蕎麦畑
山門をぎいと鎖すや秋の雲
我背戸〻二百十日の蕎麦畑
あら波や二日の月を捷さ
蕎麦より萱より細し二日月
やらして蕎麦のかさあ〻の

塩竈にて小あゆ
樵夫二人ばかりにて雲路を現はす
小博奕をうちて
そらうち地天地ひゝ紀火が
兼平の塚を栗山ゐの夫先が
月の幻や皆首立て小田の雁
影吟や晩稲掛けさる大師を
影なりて妙義赤城の見わが
稲雀栗山ゐ子対ゐ海ゐ入る

朝や秋吟時ゐれて又夕日
菊の枝枯枯のとまり雲ゐ
稲刈りて水ゐ飛ぶこむ鉢が
稲刈りてにぶくすゐ冬鉢が
墻掃のすぐに隠れる身枯が
いのれかゐ栗ゐれる人の誠ゐれ
国栗ゐかきゐ世ゐ義ゐが
椎ひろふあとに国栗高ゐ刈り
古宮や栗ゐとして柚ゐ黄ゐ

物影り菜屑を小川に
幕吹いて伶人ゆく紅葉ぶ
屋根幕のごみ掃落す芭蕉に
槍立てて通る人あり花菖
乱髪ゆや島の隅の花菖
十丈の杉六尺の蕨れ
萩散るや貧の下水濁り
稲刈りて菊おとろへ小芝に
藁葺の法華の寺や彩頭花

黄雞頭の首を抜ける天気に
門前の舟繋ぎ蕎の花
掛稲の金地飛びつく夕日かな
柔かるや鶏あるぶ土塀の隅
通抜の前の栗干す日向かな
吟るきれて栗の穂垂るみのるに
芋のるや葉の間あるみころげ落つ
一束の菊生垣ひさすゆ川に
朝川の畳を洗ふ白一つ

畑の木々多分かれし小まゝに
御格子切髪こうくるさゝぶ
遊餌干す日暮經し冬の日
しぐるゝやいつまで赤き鳥瓜
しぐるゝや豚湯ぬるみて一人の男
風呂焚ひもろ蔵多分
五六人廻搭合乘る雪の夜
合羽づく雪の夕の石部駅
雪女旅人ゆゝしく踏んけり

北越雪譜
ちとん記
雪三十三次

清元
東京名所
若冲

灯のともる東叡山や杉の雪
南天に雪吹きつけて雀啼く
水汲むや雪の合羽の女とは
大雪や関の五六人
雪つけり矢は雪の兎哉
加雪やかれ野ぶきの馬の糞
大雪や石垣長き淀の城
風呂に入て本の雪落る音よの音
蕪灰にまみれて霜の一夜哉

鍋炭の行燈を折つ霧うれ
はつつりと月の雲りはやそこの塔
石路の苔のあるを尿する小僧が
ちりまいて人のたを焚く枯葉が
ちらんべい犬拾ひそりく枯葉が
谷鈴の川株つゝゝ氷うれ
水鉢の氷捨てゝ美菊が
土さに尚し嶽の雪柱
梅盆栽の苔ゝ雪柱

苔ながら吳もが畫きゝ苔が
苔みの苔太祇の炭や冬籠
律僧の紺足袋穿つ掃除が
あちゝ向き古足袋そうてみる妻よ
十年の若芽もの世き毛布が
火桶展る姫一人や岡の家
炉開き一日暖ふ大工うれ
むつゝく炭屋をつぎかは
古屋や月の湯屋の湯をこぼす

風呂や小家を壓すを屋
つみあげて庄屋ひれふす年貢ぶ
眼鏡掛け門松の舟の着きにけり
千ゑ帰く揚荷の者の男ぶ
須磨の海の月に離れる浦ぶ
竹藪の裏を鶏鳴く入江ぶ
古へば嗤嗤河豚を咎めし
山茶花や手丸小さ脆衣の神
職業のからめ赤や枇杷の花

菜畑や山茶花をのぐる矢木立
縁の干す箱図の上の海苔ぶ
立菊やいま屋の裏の冬逃し
野と隔つ垣何ぞ蔦畑
枯菊や凍て上る立ち尽す
七湯の畑海や枯すさ
裏枯や犯女の吐く村の犬
冬枯や迎ぶる吐く里の犬

紅葉

手紙やまの〳〵くれ紙二帖
ひら〳〵と雑煮若水夫婦ふ
古鍋の中へ沸こぼつ菓子の礼
辻待の車豆〳〵雪何こぼれ
うさぎ人の渕り豆折つ二つつみ
遠屋の菓の慶清ら也逸食の先
宮所や月ら俗宮湯の禄鮮所
鳥一声り山形うつて勝為つ

里の子の類さつまうり蕎麦
対情義也郭公
眼かくしの柳青みし二階より
出るびらて也蕎を奈何せん
去年十郭公への初物
されうて紀ゆめ世界が
蕎麦陰や本うは紀の世を背く
木蓮や宇慢くさき川構
鶏と財布春の別れを惜し泣く

集四する所の射場の
義り今ふ苔さ昇のほうりて
人詩ぐ梅干しをみる山猫が
逃る度さて水彩ふ似ら蛾の頭
夏痩もせずに菊煮る女の風
小鯖買うて夫の晩物を賀ぶ也
紙をかき字をうつ長松が扇氣遣ひ異し
ぶりつの字陸ひ投げし扇氣
絵図面何のよくを人折つ力ふ

夕暮や松に蟬しみ入れ赤き
晴れ渡りて姑く幅と相對し
蚊の雲と思へば冬の庭の面に
蕗の葉から轉げ落ちを拭垣根に
子の就や三人酷を吸ふ青蛙村
書中の蛍夏の雨ありぬ鯉
岡三郎術をくよ夏の雲
鞠そんてぶしと落る東うし
先達の大形ふる浮ぶ清水に

夏の井の鳥つき敵へぬ甘露ぶ
門すゝみ人ふ来ふ水てしまれる
泥窓ふ連すばふなる小池哉
冷香や椽ふ一ふ安の九そぐ
場求ふ玄関傾け吾仁也香薷散施す
有的の月四一ける竹婦人
秋暑さ彩ふ面を押しぬぐ
拾うちは知のもえ分まれる
稲妻や二尺八寸ふ小やこう拔ら

雨来んとして頻りに揚る花火や
徐霞客の瀑を浴ひし碑かな
吟を交ふや冥うして来る出雲の出
名月をまづい笛吹く隣くれ
人は出る外の豊の月あかり
秋もはや[illegible]ばかり
松茸や野の仕事の直兒
ばさ〳〵と刈られぬ花芒
いさいや琉球芋の細きを切る

けはかりや獨すさびの初茶漬
わきまへこの栗むきあぐる鬼けた
南天の實のゆらゆらとあるの三つ
柳もとさ変して面影をおもふ
秋胡子の妻とも知らぬ茶をすすく
實椿や脆き仇名し一下むこのし
寒柑十ばかり金ぼたんの
木枯を横ふしずる砲車かな
風の後葉こしの風と破れ折つ

渡り見てや木の葉狩山の葉
炭取りの屋敷
足袋脱てみちと
能足袋の
瓦
そそ
疝癪よ小言よ人参よ年の
北向やこん〳〵叩く雪
吾兄よ
風の
吾子
五
別
針
鍋
わ
五
元

霧伴

老子西陵の生涯あみ流沙かすみはて
夏川や何をなぐさで笛を吹いてみる
ほとゝぎす去つて闇なり堀の雨
定まらぬ雲の暁や ほとゝぎす
水仙の一点白し 古書齋
みぞれ降り所の名残り行く氣の生
登瓶の筆ちかつゝ寒さ哉
春の海 新のおもゝ拾ひけり

書を賣つて書齋のすきゝ寒さ哉
海鵜とぶ と春の海 蕪村
釣帰撫つ霧の銀のしぶきかな
春霞國のへたては生うけり
青嵐 瓢 酒屋 別墨うれ
人一人ふゝてぬ 欅の宿
かげろふ 寂蓮 て 駒ば
やね苔の 生 とんぼのねすれ
ほひとつ とぶや 秋 のかちの音

かげろふ
ほとゝぎす
弥馬の
眼つきが

雲ゐのさげて見やる暮天の嶺新
舟岸ちかき舟里の古唐
帰途何ぞや我酒飲まず月梁浮
欠牡丹折らるるてもやや浮左右
織物のすき腹なる空サ哉
辰の半ばとやこころに荷葉さく
蛇の衣竹に竿のあらしうれ
光るなすこは露及流沙のすまさ

○七部集中巻句

雨の月ひとりなるこの巻あり（七部集越人）
名月やかい寝こころはなしみ　昌碧
かさなるや雲のあるの山　加生
初雪をうたてうたるる旅ひとり　越人
刻印の稗穀ふるしうれうれ　昌碧
五人扶持とりて　柳坡
土はこふ籠の数り　柳坡
麦の穂と共ひそかに筑波山　加生

第四之家の義鉄の立さま　浴力
鍋ふたのけぶり　さま〻の家　孤屋
玉あや枕　つゝうもれ木　支考
ぬれつゝに並ひて孤ぬる秋の蝉　丈草
井の水のつゝかになる立さま　春下
墓原や編書の屋根の水　文梁
屋で冊よみへすや　免笑　涼帝

青柳を流らん　はやくらめ　上総　秋色　仙路　菊多
苦さゝし金の形や　移香　白枝
先蛾し浴室まるものはるゝめ　鹿兒島　芹夫
笠や竹の枝をふくしたゝ　なにわ　荷今
蕣の言かりゝてゝ　絵姫
山姫のはをかゝてや　一花　五所　杜江
屋根て假宮のしたゝ柳　春林